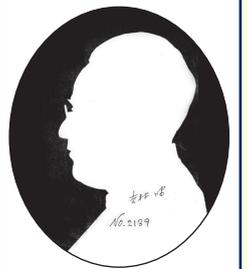


吉村昭記念文学館 ニュース 万年筆の旅



vol.12

平成31年3月22日発行
登録番号(30)0104号
編集・発行／荒川区
問合せ／
荒川区地域文化スポーツ部
ゆいの森課
吉村昭記念文学館
〒116-0002
東京都荒川区荒川112-50-1
TEL.03-3891-4349

題字／津村節子氏
切絵／山崎達郎氏

【開館時間】
9時30分～20時30分
【休館日】
毎月第三木曜日・特別整理
期間・保守点検日・年末年始他
【入館料】
無料

事業報告

荒川区・福井県合同企画 「おしどり文学館協定締結一周年記念事業」

平成29年11月5日に、福井県ふるさと文学館と、作家ご夫婦に関する文学館同士の初の連携協定「おしどり文学館協定」を締結しました。そして、この度締結一周年を記念して、両館で合同企画展及び講演会を開催しました。互いに広報活動を行うほか、福井県が制作した津村節子氏(福井県ふるさと文学館特別館長・ゆいの森あらかわ名誉館長)の撮り下ろしインタビュー映像を両館で上映しました。

今後とも手を携え、ゆかりの文学の魅力を皆さまに伝えてまいります。

吉村昭記念文学館の事業

津村氏の生い立ちと作品を紹介する企画展「津村節子展 生きること、書くこと」(会期：平成30年10月20日～12月19日)を開催し、福井県ふるさと文学館からお借りした資料も含め約200点を展示しました。

講演会では、吉村・津村夫妻の元担当編集者、山口昭男氏(岩波書店前代

表取締役社長)に、両氏との心温まる交流を中心にお話しいただきました。

福井県の職員も出席し、東村健治福井県教育長と西川太郎荒川区長が挨拶をしました。

また、企画展の関連事業として、俳優の竹下景子氏による朗読会「智恵子飛ぶ」を開催しました。

福井県ふるさと文学館の事業

津村氏の業績やこれからの作家活動への思い、福井ゆかりの作家との交流、夫婦のつながりなどを紹介する企画展「津村節子〜これまでの歩み、そして明日への思い〜」(会期：平成30年10月26日～平成31年1月23日)を開催しました。

講演会では、吉村氏と親交があった出久根達郎氏(日本文藝家協会理事長・直木賞作家)に、「津村・吉村文学の魅力」と題して両氏のお人柄と作品について語っていただきました。なお荒川区の職員も出席しました。

「津村節子展」関連イベント 朗読会「智恵子飛ぶ」

日時：平成30年11月23日(金・祝)

14時～16時30分

場所：ゆいの森あらかわゆいの森ホール

俳優の竹下景子氏をお招きし、朗読会を開催しました。竹下氏は、平成28年、津村節子氏の著作『果てなき便り』(平成28年 岩波書店)を原作とするNHKオーディオドラマ・新日曜名作座「果てなき便り」に出演され、作家夫婦の歩みを演じられました。

今回の朗読会では、津村氏の芸術選奨文部大臣賞受賞作『智恵子飛ぶ』(平成12年 講談社文庫)を取り上げました。



朗読する竹下景子氏

この作品は、高村光太郎の妻、智恵子の実像に迫った評伝小説です。原作より、智恵子が洋画家を志す場面から、光太郎に看取られて最期を迎える結末までを朗読していただきました。

竹下氏は、意気軒昂な光太郎の傍で、創作に行き詰まる智恵子の苦悩と、病に陥った智恵子に寄り添う光太郎の悲痛な思いを、「智恵子抄」の引用詩とともに、情感溢れる朗読で演じ分けられました。その力強くも優美な朗読は、満場を魅了し、二人が立ち現れるようでした。

終演後は、「互いを思い合う夫婦の愛が心に染みだ」など、多くの感動の声に寄せられました。智恵子と光太郎の軌跡に心打たれ、作品世界の深い余韻に包まれる朗読会となりました。



終演後の竹下景子氏と
会場で鑑賞された津村節子氏



講演を行う山口昭男氏

おしどり文学館協定締結
一周年記念講演会

「果てなき

往復書簡——

一編集者から見た

吉村昭・津村節子

日時：平成30年11月4日(日)

14時～16時

場所：ゆいの森あらかわゆいの森ホール

岩波書店前代表取締役社長で、吉村・津村両氏の担当編集者を務めた山口昭男氏にお話しいただきました。
ここでは講演会の内容の一部をご紹介します。

雑誌の編集者として

私が最初に雑誌「世界」の編集部配属されたとき、自分に課したことがあります。会いたい人に会いに行くということと、一日二人の人に会ってお話しをするということです。それで30年間でお会いした著者の先生方が積み積もって1万人を超えました。中でも吉村さん、津村さん、水上勉さん、井上ひさしさん、中野孝次さん、辻井喬さん等とは大変親しくさせて頂いていただきました。

岩波書店と吉村昭

最初に吉村さんにいただいた原稿は、1969年6月号の「世界」に掲載された「青い街」という短篇です。岩波書店三代目社長の緑川亨が吉村さんの中学・高校の先輩だったということもあって、そのご縁でこの時短篇をいただいたと聞いています。次に吉村さんが書かれたのが1981年6月号の短篇「蜜柑」です。この作品をいただいた時が、私が吉村さんと最初に出会った時です。同じ年に、今でもよく引用されるエッセイ「史実と創作について——戦史小説から歴史小説へ——」を書いて

いただきました。そして1982年の6月号から、今でも読み継がれている名作「破獄」の連載を始めていただきました。

タイトル会議

この「破獄」というタイトルも最初は単なる「脱獄」とか、いろんな候補があつたのです。いつも、こういう本を作る時に、吉村さんと「タイトル会議」と称するものをやります。近くの小料理屋で、「タイトル会議」と称して飲み会をやるわけです。この「破獄」というのもその時、決めたものです。

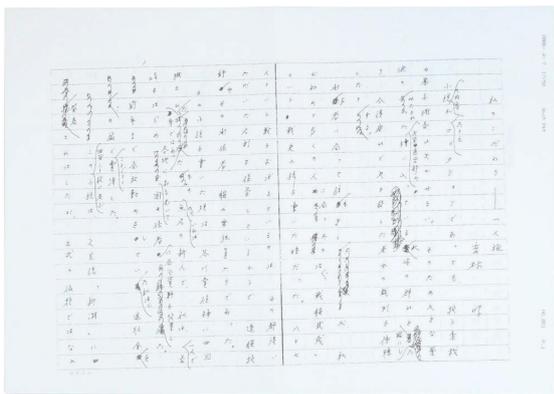
「ニコライ遭難」での発見

1992年7月号からは「ニコライ遭難」を連載していただきました。これは、大津事件を扱った小説です。この中のニコライ二世が長崎で一夜を明かすという部分は、資料的にも吉村さんが初めて取材して明らかにしたことです。しかも、ニコライ二世がそこで龍の刺青をしたということも初めて発見された事実で、なぜそれが見つかったかというところ、その刺青の見本帳が残っていたからです。その見本帳を吉村さんが見つけて、この小説に取り入れたというわけです。

吉村最後のエッセイ「一人旅」

なんといつても忘れられないのは、遺稿となったエッセイです。2006

年、お亡くなりになった年の4月にいただいた「一人旅」という原稿です。吉村さんは旅と言っても観光旅行は全くされない人ですから、あくまで取材です。しかも吉村さんは、「取材」とは言わず、「調査」とおっしゃっていました。調査は一人です、我々と落ち合うのは夜の席ということもしばしばでした。私自身も「ニコライ遭難」の取材では、長崎・宇和島と一緒しました。
実はこの「一人旅」を書かれていた頃、吉村さんはもうかなり重い臍臓ガンを侵されていたのです。こちらは何も知らずに原稿をお願いしていたわけです。



自筆原稿「私のこだわり——一人旅」(FAX)
山口昭男氏蔵

編集者との新年会

津村さんとゆっくりお話ししたのは、多分、吉村家で開かれていた新年会の席が最初だったと思います。「破獄」を連載していた時で、私が初めて参加した新年会でした。1983年の1月です。毎年1月は、ほぼそういう感じで、多い時には30人近くの編集者が先生のお宅に集まって、夕方から、早い人は5時頃から来て飲んでいました。集まった編集者はみな私の先輩で、そこで話される雑談は大変貴重で学ぶ機会が多かったです。非常に楽しい会でした。

岩波書店と津村節子

初めて津村さんからいただいた原稿は、「陣痛」というエッセイです。1985年11月号の掲載です。小説を書くということは子どもを産む時と似ている、まさに編集者は助産師さんです、という内容のエッセイです。当時、津村さんは57歳、私は36歳でした。

1988年6月号からは「流星雨を、2001年1月号からは「絹扇」を連載していただきました。この「絹扇」は福井の春江の絹織物が舞台になっています。津村さんは少女時代を福井で過す。父親は織物取引業に携わっていたわけですから、津村さんにとっては、福井の絹織物というのはまさに少女時代に戻ることを意味していました。

2005年には、『津村節子自選作

品集』全6巻を出させていただきました。津村さんには、「将来残しておきたい作品を中心に選んでください」「巻末には自伝も連載してください」という大変無理なお願いをしました。(自選作品集は)毎月刊行ですからね。でも、本当によくできたものに仕上がったと思っています。

後で知るわけですが、この時には、吉村さんは舌ガンにおかされていたのです。にも関わらず津村さんは全く毅然として、いつもと変わらず毎月原稿を締切に遅れることなく、くださいました。それは凄いなと思います。

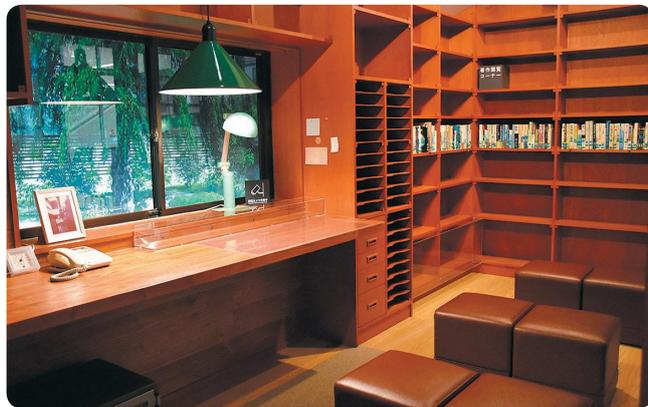
果てなき往復書簡

一昨年(2016年)ですが、津村さんは『果てなき便り』という吉村さんと往復書簡130通余りをもとにしたエッセイ集を出されました。

結婚前の若い頃の手紙というのは、ほとんど恋文です。ですけども、若かりし頃の吉村さんと津村さんの、貧しいけれども文学を志していくという決意がひしひしと伝わってくる往復書簡でした。しかも希望に満ちた、そういう心情が伝わってくる手紙の数々です。

吉村さんが亡くなって12年たった今でも、津村さんは吉村さんとうとうした往復書簡を交わしているようだなと。それで、今日の演題を「果てなき往復書簡」とさせていただいたわけですね。

資料燻蒸について



燻蒸作業のため資料搬出した後の書齋再現展示

ゆいの森あらかわ特別整理期間の休館に合わせて、平成30年10月11日から23日まで、書齋展示資料の燻蒸作業を行いました。

「燻蒸」とは、貴重な資料の殺虫や殺菌を目的として、一定期間密閉した場所に、資料と気化した薬剤を封じ込める作業のことです。様々な害

虫やカビなどによる収蔵資料の劣化や汚損を防ぎ、次世代へと引き継ぐために、文学館では外部の専用施設に資料を運搬し、定期的に燻蒸を行っています。

今回の燻蒸では、書齋再現展示にある大部分の資料を、専用施設へ搬出しました。資料の多くは、実際に吉村氏が使用していたものです。燻蒸を終えた資料は、復元作業によって、再展示されました。燻蒸期間中の開館日にあたる10月13・14・20・21日の4日間は、書齋再現展示内に、吉村昭著作閲覧コーナーを移しました。通常は隅々まで資料を展示していますが、この時は、空になった棚に吉村作品を並べ、ご来館の皆様へ、資料がある書齋の風景とは一味違う特別な空間を、ゆっくりと体感していただきました。

また、著作閲覧コーナーがあるエリアでは、特別展示として、吉村氏が取材時に使用した自筆ノートを、写真パネルで展示しました。2階常設展示室入口のバナー(垂れ幕)で使用している複数のノートから一部を紹介し、間近でご覧いただきました。

〈学芸員 北山ゆかり〉

第2回 トピック展示開催報告

津村節子

『智恵子飛ぶ』の世界

高村智恵子と夫・光太郎の
愛と懊悩

前期：平成30年9月21日(金)～
11月14日(水)

後期：平成30年11月16日(金)～
31年1月16日(水)

場所：2階 著作閲覧コーナー

2階常設展示室の著作閲覧コーナーでは、当館所蔵資料を中心に、学芸員の一手しとして、トピック展示を開催しています。第2回は、津村節子氏の芸術選奨文部大臣賞受賞作『智恵子飛ぶ』に関する自筆資料や関連書籍のほか、写真、パネルなど26点を展示し、作品世界に迫りました。ここでは、展示内容の一部を紹介します。

「智恵子抄」に抱いた感動と疑問

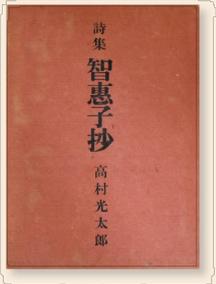
『智恵子飛ぶ』(平成9年 講談社)は、彫刻家・詩人である高村光太郎の妻、智恵子の実像に迫り、その生涯を丹念に綴った評伝小説です。

高村(旧姓長沼)智恵子は、明治19年(1886年)、福島県安達郡油井村(現二本松市油井)で、酒造業を営む父と母の間に二男六女の長女として生まれました。福島高等女学校を卒業後、日本女子大学校に入学します。授業で学

んだ洋画に関心を寄せ、卒業後は洋画家を志して、太平洋画会研究所に通いました。

大正3年(1914年)、高村光太郎とともに芸術の道に精進する生活を始めます。しかし、高い志ゆえの世俗を離れた貧窮生活や、実家の破産による一家離散、自らの創作活動の行き詰まりなど、度重なる困難に直面し、元來病弱だった智恵子の健康状態は悪化しました。やがて、昭和6年(1931年)頃から統合失調症の兆候が顕れ、画室で命を絶とうとするも未遂に終わります。その後の2年余りの入院生活で、千数百点に及ぶ紙絵を製作し、才能を開花させますが、同13年、粟粒性肺結核のため、光太郎に看取られ、53年の生涯を終えました。

津村が、東京府立第五高等女学校に入学した昭和16年、太平洋戦争勃発の4か月前に、光太郎の著作『智恵子抄』(龍星閣)は出版されました。智恵子への愛を詠った詩や短歌、散文を取めたこの作品は、戦時下において広く読み継がれました【写真1】。



【写真1】高村光太郎『智恵子抄』(昭和16年 龍星閣)



【写真2】「智恵子の切抜絵」が掲載された「新風土」(昭和14年2月号 小山書店) 紙絵の写真を掲載。創作手順や没頭する智恵子の様子を綴った。

津村もまた、勤労奉仕や、学徒動員に従事する中で「智恵子抄」と出会いました。同じ志のもと、深い絆で結ばれた愛の形に感銘を覚えます。一方で、なぜ、理想的な芸術家夫婦であったはずの二人の生活が破綻し、智恵子は精神に変調をきたしたのか、という疑問を抱きつつ傾倒を深めました。

智恵子の紙絵に見出したもの

光太郎は、智恵子逝去の翌年、「智恵子の切抜絵」(「新風土」昭和14年2月号 小山書店)を発表しました【写真2】。紙絵を「芸術品」と記した上で、全て「智恵子の詩であり、抒情であり、機智であり、生活記録であり、此世への愛の表明である」と述べています。そして、「此を私に見せる時の智恵子の恥かしさうなうれしさうな顔が忘れられない」と結びました。

津村は、夫婦ともに作家の道を歩む自身の経験から、智恵子と光太郎の愛情を推し量りました。一つ屋根の下で、各々の創作に取り組む芸術家夫



【写真3】「無垢の美の世界—智恵子の紙絵」(「太陽」昭和50年5月号 平凡社)



【写真4】津村節子 高村規『智恵子から光太郎へ』(昭和54年 講談社文庫)

婦の厳しさに思いを寄せ、紙絵が、発病後に創作されたという点に心惹かれました。昭和50年、調査のため、光太郎の甥、高村規を訪ねて、千百余点の紙絵を手に取ります。津村は、その一枚、一枚にほとばしる智恵子の芸術に対する渴望を読みとりました。旺盛な創作活動を展開する光太郎の隣で、思うように油絵を描けず、挫折した智恵子の苦悩を理解し、「無垢の美の世界—智恵子の紙絵」(「太陽」昭和50年5月号 平凡社)を著しました【写真3】。初公開となった高村規撮影の初期作品に解説を加え、デッサン力の確かさや、技巧と作風の変遷を検証しました。愛惜の思いをこめて、紙絵の成り立ちを紹介しています。

また、昭和54年には、智恵子の立場から二人の愛を捉えた『智恵子から光太郎へ』(高村規共著 講談社文庫)を刊行しました【写真4】。さらに、「光太

郎に捧げられた紙絵」(北川太一・高村規・藤島宇内共著『光太郎と智恵子』平成7年新潮社)では、光太郎の心情と、紙絵にみる愛の形を記しました。

新たな智恵子像を著す

執筆を通して、智恵子の心の動きに対する理解を深めた津村は、「智恵子飛ぶ」の連載に着手します。智恵子の幼少時から少女時代の資料は僅かだったことから、福島県二本松市を訪ね、鞍石山、磐梯山周辺などを取材し、智恵子が愛した故郷の息吹を体感しました。また、母校の日本女子大学や雑司ヶ谷周辺をはじめ、油絵を学んだ太平洋美術会、駒込林町にあったアトリ工跡、犬吠崎や九十九里浜、婚約に至った上高地など、ゆかりの各地を綿密に取材し、膨大な資料調査を行いました。智恵子の書簡や、遺文などの資料も分析し、実像に迫りました。

「本」(平成7年7月号)同9年6月号 講談社)での2年にわたる連載をまとめて、平成9年(1997年)に刊行した『智恵子飛ぶ』は、第48回芸術選奨文部大臣賞を受賞しました【写真5】。



【写真5】津村節子「智恵子飛ぶ」(平成9年 講談社)
表紙は智恵子の紙絵「花」。

従来、あまり着目されなかった一人の芸術家である智恵子の内面に焦点を当て、その心の動きをたどることで新たな智恵子像を示し、芸術家同士の夫婦ゆえの愛と懊悩を描き出しています。

智恵子が求めた生の在り方を捉える

作中の智恵子は、強い芯をもつ女性として登場します。聡明で心優しく、一人の静かな時間を好む一面と、人の意表を突く活発な面を併せ持ち、自身が望む人生を歩むために行動します。

津村は、智恵子の生来の資質や、人間性が養われた環境をたどり、人生観の本質を捉えました。日本女子大学校を卒業した智恵子は、平塚らいてうが創刊した『青鞥』の表紙絵を描きます【写真6】。「新しい女」として、注目を集める女性たちと親交をもちながらも、志す芸術の道を行く智恵子の信条を「自分は自分であり、自分のままを生きたい。女だから、男だから、という意識もなかった」と表しています。自負心を持ち、男性の画学生の中で、デッサンや油絵に取り組む姿を活写しました。

智恵子は、価値観を共有する光太郎の人となりや才能、旧態依然とした美術界へ挑む姿勢に強く惹かれます【写真7】。津村は、二人が出会った当初、智恵子が自ら書簡を送り続けたという事実に着目しました。智恵子が積極的に愛を伝えたことで、次第に変化する光太郎の心情を追い、婚約に至る過程を瑞々しく描き出しています。光太郎の結婚に対する考えに共鳴し、目指す目標に向かつて「自由に生きたい」という智恵子の情熱と、確固たる意志を綴りました。



【写真6】智恵子が表紙絵を描いた『青鞥』(明治44年9月)
写真提供 日本女子大学成瀬記念館

芸術家夫婦の愛と懊悩を描く

因習に囚われない二人は、披露宴のみを行い、式も挙げず、婚姻届も出さずに、理想に向かって歩み始めます。しかし、智恵子には、肉親の死や、実家の没落など心悩まされることが相次ぎました。

作中の智恵子は、光太郎の才能を心から尊敬し愛するからこそ、心配をかけるまいと、苦悩や葛藤を抱え込みます。また、光太郎が詠う理想の自分であり続けようと焦り、自身の才能に対する光太郎の評価に思い悩みました。やがて、自由な生の在り方を望み、創作意欲に溢れていた自分自身を見失います。



【写真7】「新しい女(一七)」(『読売新聞』明治45年6月5日)に掲載された智恵子
「最も新しい女画家」と紹介された。翌年、光太郎と出会う。
写真提供 二本松市教育委員会

津村は、誇り高く、気丈に困難と向き合う智恵子の心理を洞察しました。同時に、互いを思いやりながらも、無意識に相手の才能を圧してしまふ芸術家夫婦の内情を掘り下げました。そして、智恵子が絶望を深めた大きな要因は、光太郎の勧めで文展に出品した油絵が落選し、洋画家としての自信を喪失したこと、また、その失意を感知せず、精神的な仕事ぶりや、「廠のように」立ちほだかる光太郎の前に、意気阻喪したことにあると見通しました。抑制された筆致により、智恵子の心の機微を浮き彫りにしています。

また、津村は、智恵子の苦悩を察することが出来なかった光太郎の視点に立ち、その無念と悔恨を汲み取りました。発病後の智恵子と入籍を果たし、寄り添う光太郎の愛情と、慟哭の思いを描き出しています。智恵子は、発病により、思い煩う事から解放され、「美への欲求」を紙絵に開花させました。病室で、光太郎だけに紙絵を見せる場面では、純粹な愛が深まり、哀切が滲みます。「智恵子飛ぶ」に描かれた智恵子の一途な愛の形と、ひたむきに自らの芸術を追求した生の在り様は、没後80年を経て今なお、主体性をもって人生を切り開き、歩むことの意義を語りかけています。また、美しくも哀しい夫婦の軌跡は、互いを思い合い、尊重する人間愛の本質を伝え、多くの示唆を与えています。

〈字芸員 深見美希〉

著作紹介
第6回

『ふおん・しいほととの娘』



『ふおん・しいほととの娘』上・下
(昭和53年 毎日新聞社)

やがてお稲は、眼をあげた。顔は青白かった。

「私に、そのようなことができますでしょうか」

低い声であった。

「なれるかなれぬか、意志次第。何事も必ずやれると思えばその通りになる。まず、やるというかたい意志をもつことだ」

敬作の語気は、鋭かった。

お稲はしばらく口をつぐんでいたが、手をつくすと、

「私は、女医者になります。なりとうございます。多くの妊婦の命を救いとうございます」

と、言った。

敬作は、何度もうなずいた。

(『ふおん・しいほととの娘』下)

昭和53年 毎日新聞社

楠本いねとその時代 「ふおん・しいほととの娘」は、女性の医師が一般的ではなかった時代に医学の修業に励み、のちに産科医となった楠本いねの生涯を描いた作品です。

吉村は、江戸後期から明治初期までの激動期を、多くの制約を抱えながら懸命に生きたいねに関心を抱き、この作品を執筆しました。いねを軸に、欧米列強の脅威にさらされた時代の日本や、近代医学の礎を築いた医師たちの姿も描かれています。

いねは文政10年(1827年)5月6日、長崎オランダ商館医師フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトと遊女たきの間に生まれました。2歳の時、父シーボルトがスパイ容疑で国外追放となりましたが(シーボルト事件)、いねは周囲から父の優れた医師や学問に対する見識の深さを聞きながら育ち、やがて医者を目指すようになりました。

シーボルトの門人だった宇和島藩の蘭方医二宮敬作に医学の基礎を学んだのち、備前岡山の石井宗謙やオランダ人医師ポンペのもとで産科医術を修業し、明治4年(1871年)、東京府京橋区築地で産科を開業します。明治6年には、福沢諭吉の推薦で宮内省御用掛を拝命し、明治天皇の第一子誕生に立ち合いました。のちに長崎でも開業しますが再び上京し、明治36年8月26日、麻布狸穴で77年の生涯を閉じました。

調査により浮き彫りにした人物像 可能な限り史実を踏まえた上で、いねの生きる姿を追いいたいと考えた吉村は、

いねの生まれ育った長崎や、医学の修業を積んだ宇和島、岡山に赴き、資料調査を重ねました。

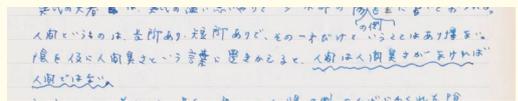
調査で重視したのは、いねやシーボルトの(陰の部分)を明らかにすることでした。伝記ものにはありがちな美化された人物像ではなく、陰と陽の両面を描くことで、その人物の(人間臭さ)を浮き彫りにしたいと考えたのです。

いねの娘たかこをめぐる出生の謎やシーボルトの異性関係、スパイ活動の実態など、新たに見出した事実在即して、いねやシーボルトの人間らしい側面を描き出しました。

吉川英治文学賞受賞 「サンデー毎日」の昭和50年(1975年)6月29日号から52年10月30日号まで、約2年4カ月にわたり連載されたこの作品は、吉村の中で最も長い小説となりました。53年に単行本化され、翌年、第13回吉川英治文学賞を受賞しました。贈呈式で吉村は「いろいろな方に資料を見せていただき、その方々に受賞で報いることができてうれしい」と感謝の意を表しました。

明治維新から150年が経過し、平成から新たな時代を迎えようとしている今、激動の時代を強い意志で生き抜きたいいねの姿は、私たちにひとつの生(いのち)の在り方を提示しています。

〈学芸員 鈴木志乃〉



自筆講演メモ「シーボルトとその周辺」 人間には長所と短所があるとし、「人間臭さがなければ人間ではない」と記している。

文学館グッズ販売のお知らせ



クリアファイル(A4)



付箋(75×75mm、50枚綴) 写真の左側が表紙、右側が中面

文学館関連グッズ「クリアファイル」(200円)と「付箋」(300円)をゆいの森あらかわ1階総合カウンターで販売しています。ゆいの森あらかわ名譽館長の津村節子氏が愛用していた着物の柄の一部をデザインに使用しました。

◎郵送で購入希望の場合は、グッズ代金を現金書留又は定額小為替(為替は無記入・無記名で、送料の切手)※と併せてお送りください。
◎グッズ名・氏名・住所・電話番号を明記したものを同封してください。
※送料は重さによって変わるため、事前にお問合せください。